



「今日はたくさん売れたね」

「今日はたくさん売れたわ」

ナギとナミがほくほく顔でお金を手分けして数えます。

「あれ、ナミのほうが多かったかな」

「いいえ、ナギのほうが多いはずよ。だって、わたしのほうはいつもより少ないもの」

「でも、ぼくのほうもいつもより少ないよ」

「それはヘンよ。だっていつもよりたくさんお魚を持っていったじゃない」

「アゴラの人が金額を間違えたのかな」

「行ってみましょう」

仲買人はもう帰りたいくをすませてアゴラを後にしようとしていました。がっしりした体つきの仲買人は、ふたりの話を聞くと大笑いします。

「そりゃあ、きみたち、大漁になれば値は下がる。値が下がれば、売上げも減る。豊作貧乏って言うだろ。今日は他の漁師たちはかんかんだよ。そんなことも考えずにがさごそ魚をとったバカがいるってね。ほとぼりがさめるまで、どこかにかくれていたほうがいいくらいだ」

ふたりが神殿にもどると、仲買人の言ったとおり、漁業組合の長が^{おき}むずかしい顔をして待っていました。

「きみたちは神殿のために働いているから、これまで大目に見てきたが、今日